

泌 尿 器 科 紀 要

第 12 巻 第 6 号

昭和 41 年 6 月

随 想

小児腫瘍患者の思い出

東京慈恵会医科大学助教授 千 野 一 郎

小児の泌尿器科疾患を、主テーマの一つとしてから、早くも2年を経たが、浅学菲才の私のこと、いまだにさしたる成果もあげていないことを、深く反省している。

小児を特に注意するようになってから、健康保険の規定にある6才未満の診察料加算と云うことが特に目につくようになった。それと云うのも、私共の病院では、カルテを作る場合、教室カルテの上に、保険カルテを乗せ、その上に保険の処置・点数を書き込む用紙を重ねて綴ることになっておる、この一番上の用紙の欄外に、「6才未満」と、大きいゴム印が押されているカルテが、私の診察机の上に置かれるようになったからだ。このゴム印を見て、小児が来たなど云うことがすぐわかり、へんなところで保険制度の便利さを味わっている。

私は小児患者の中でも、特に腫瘍例を集めたいと思っている。しかし御承知のように、小児患者に見られる疾患は、非特異性感染症、奇形等が多く、机の上に並ぶカルテをそっと開いてみると、主訴の多くは、排尿痛、包皮の発赤、包茎、睾丸を触れない、尿が陰茎の途中から出る等々。およそ病歴で診断が予測されるものが多い

こうして腫瘍患者に注意していた矢先、分院から「8カ月の男児で、腹部に腫瘤を触れ、硬い。どうも腎腫瘍ではないかと思われる」との電話連絡があった。早速入院させて、腎盂撮影をしてくれと頼み、何日に診にゆくと約束した。こんなとき、不幸な病を背負った小児或は両親には申し訳ないが、何か待っていた人が来たような感じがする。

約束の日に分院を訪ね、小児病室に案内された。部屋は比較的小さく、両側に4床ずつ並んだ8人部屋である。子供等は柵につかまったり、ねころんだりして注意深く私の歩いて行く先を見つめている。入口のすぐ右の、両親にあやされ、丸々と太った手足を動かしている血色のよい赤ちゃん、これが患者だった。これがその患者かと思われる位に元気な赤ちゃんだった。受持医から両親に紹介され、病歴を読みながら種々尋ねたりして診察を始めた。患児は突然の侵入者が顔や、頸をなで初めたのにびっくりしたのか、大きな泣き声を出した。腹部を上から見たり横から見たのち、触診しながらマジックインキで腫瘍の輪郭を描いてゆく。写真をとるために両親の手を借り押えてもらった。どんな気持ちで押えていただろうか。私共の神経は患児の所見をとる方に集中していて感情の入る余裕がない。

やがて診察も終り、腎盂撮影の結果と合せて見ると、明らかに腎腫瘍である。いよいよ結果を説明する段になった。恐らく両親にとっては大本営発表も比較にならない位の大きな不安をもっていたことだろう。何%かの希望と、何%かの不幸を予測しての私の説明の中から、その何れに比重が重いかを敏感に感じとったに違いない。

しばらくしてから、患児との出会いを話してくれた。子供のなかったこの両親は、何年間かかかって宝を探し求め、やっとのことで現在のこの子を貰うけた。周囲を気にしてしばらく家を離れたり、乳母を探したり、ミルクの与え方を研究し、生活の総てをこの患児に注いできたという。その子供が、と云っては声をつまらせる両親に励ましの言葉をおくったが、しょせんは他人の空言のように聞えていたかも知れない。

やがて本院に移し、手術する日が訪れた。手術は経腹式に行ない無事終了、術後の状態も良好であった。剝出腎は殆んど腫瘍で占められ、断面は丁度石けん様と云うか、ムチン様と云うか、灰白色で光沢のある腫瘍である。或はの期待を持って病理組織の結果を待ったが矢張りWilms 腫瘍だった。しかし術後の経過は順調で創部も治り、 ^{60}Co 照射も終了して、喜びの父親の腕にだかれて無事退院して行った。悲しみは喜びと変って、日一日の生長を楽しく語ってくれた。

此の喜びも長くは続かなかった。やっと歩き出した術後7カ月頃、胸部レ線写真にあやしい陰影を認めるようになった。これは漸次拡大し、最早や転移は疑いない事実となった。そんな冬の或る日、病状を知らせる電話があった。鼻汁が出、息苦しそうだから是非診てもらえないだろうかと、その声はどんなものにもすがり度い気持ちをひたむきに訴えていた。

患児はアパートの一室で、荒い息づかいをしながらもしきりと自動車の絵本を見ながら話しかけてきた。部屋の隅には、せがんで買ってもらった子リスがしきりと音を立てて動き廻っていた。夢のような日々の記憶をアルバムに綴り、その中に私に抱かれてとった写真を見つけて、涙する両親の姿は本当に痛ましいの一語につきた。

やがて、マイトマイシンや ^{60}Co 照射療法の甲斐もなく、また病室に横たわり、酸素テントに入る身となった。東京タワーの見える部屋で、外が見たいとせがんで立ち上ろうとするので、そっとテントから出して見せてもやった。併し疲れてすぐ横になってしまった。本当に一日一日が生命の灯をともしてゆくと云う状態となり、テントの水を砕くことが両親の大事な仕事になっていった。

こうした仕事の手も止まり、生命の灯が消えたとき、薄紅を頬に塗った吾が児にすがりついて泣き出した。長い長い涙であった。すべてが終わったというように。術後満1年であった。両肺は全く葡萄の房のようで、正常な肺組織は全く見えなかった。今更ながら生命力の強さに驚かされた。心から冥福を祈った次第である。

こうして患児は、吾々の努力もむなしく死んでいった。医師と云う立場からは冷静に、疾患の診断、治療に当らねばならないことは云うまでもない。しかし小児疾患の治療を志す者にとっては、親との接触が大きな問題である。本文は感情的要素があまりにも多いものとなってしまったが、今後も、このような症例に直面することが多いと思う。これは小児疾患ととりくむ者の宿命であろうと思う。しかし、こうした一例、一例を尊い体験として、一人でも多くを、そして、一日も早く、このような疾病から救うことが吾々に課られた使命であろう

終りに、私のような文才のない者が、随想をかくことをお引き受けしてしまって、誠につたない文を書きましたが、御寛容の程お願い申し上げます。